

鳥栖市文化財調査報告書第75集

幸
津
霞
堤

幸 津 霞 堤

安良川二線堤（霞堤）文化財発掘調査報告書

鳥
栖
市
文
化
財
調
査
報
告
書
第
75
集



二
〇
〇
五

鳥
栖
市
教
育
委
員
会

2005

鳥栖市教育委員会

鳥栖市文化財調査報告書第75集

安良川二線堤（霞堤）文化財発掘調査報告書

S A I T S U K A S U M I T E I
幸 津 霞 堤



2005

鳥栖市教育委員会

序

本書は、一級河川安良川二線堤掘削に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した、鳥栖市幸津町に所在する霞堤の調査報告書です。

調査の結果、江戸時代前期から近代にかけての堤防築造過程が確認され、貴重な資料を多く得ることが出来ました。

本報告書を通して地域の文化財に対して一層のご理解をいただき、また学術文化の向上に幾分か寄与するものであれば幸いに思います。

最後になりましたが、開発と文化財保護との調整にご理解とご協力をいただきました、国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所ならびに地元の皆様、また発掘作業や整理作業に従事された方々に厚く御礼を申し上げます。

平成17年2月15日

鳥栖市教育委員会

教育長 中尾 勇二

例 言

1. 本書は、安良川二線堤掘削に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した、鳥栖市幸津町字上川原に所在する霞堤の調査報告書である。
2. 発掘調査は平成15年11月13日から平成16年1月14日、整理報告は平成16年5月27日から平成17年2月28日まで、国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所の委託を受けて、鳥栖市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、筑後川河川事務所工務第一課、筑後川河川事務所久留米出張所、株式会社栗山建設ならびに佐賀県教育委員会の協力を得た。
4. 出土遺物の整理を含む報告書作成作業は鳥栖市藤木町文化財整理室で行った。

表土除去	(株)龍工業
発掘作業	久保山隆弘・高田伊莫・中山エミ子・中島トミ子・仁田利宣・松隈マチ子・山下重信・吉戸菊子・龍頭啓一
遺構実測	(株)埋蔵文化財サポートシステム・権藤トミ子・平田博子・毛利美代子・山本美代子・島 孝寿
遺構写真	(株)埋蔵文化財サポートシステム・(有)空中写真企画・島 孝寿
遺物整理	毛利よし子・山本美代子
遺物実測	中島貞子・権藤トミ子
製 図	毛利よし子・権藤由美子
遺物写真	島 孝寿
5. 報告書作成に際し、家田淳一氏（佐賀県立博物館）より出土遺物についてご教示いただいた。また土層画像編集は田中大介（生涯学習課市誌編纂係）の協力を得た。
6. 本書の執筆・編集は島が担当した。

凡 例

1. 遺跡の略号は霞堤（AKS）である。
2. 遺構図に用いた方位は、座標北である。
4. 測定値の表示に用いた単位は遺構m、遺物cmを原則としている。
5. 表で示した計測値は、（ ）は復原値・推定値、〈 〉は残存値を表記するものとする。
6. 堤防名称
 - ・犬走り 堤防の川裏側ののり先に設けられた地盤よりやや高い狭い平場
 - ・嵩上げ 今ある堤防の天端に盛土をして高さを増すこと
 - ・天 端 堤防上部の平場
 - ・堤敷幅 堤防の表のり先から裏のり先までの築堤されている部分
 - ・堤内地 堤防により洪水から守られている土地
 - ・法 面 切土や盛土の土砂側面の斜面
 - ・副 堤 本堤と距離を隔てて設けられる堤防

本文目次

第1章 調査の概要	1
I. 調査に至る経過	1
II. 調査の組織	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
I. 地理的環境	2
II. 歴史的環境	2
第3章 調査の内容	7
I. 遺跡の調査	7
II. 遺跡の概要	7
第4章 まとめ	24
第5章 霞堤の築造意義	25

挿図目次

図1 鳥栖市周辺位置図(1/200,000)	3	図13 第3堤防・第3試掘坑出土遺物(1/3)	15
図2 遺跡分布図(1/30,000)	5	図14 第3堤防土層図(1/110)	16
図3 霞堤現状位置図(1/2000)	6	図15 第4堤防・第4試掘坑(1/200)	17
図4 第1堤防・第1試掘坑(1/200)	8	図16 第4堤防・第4試掘坑出土遺物(1/3)	18
図5 第1堤防・第1試掘坑出土遺物(1/3・1/4)	9	図17 第4堤防出土木杭および竹杭(1/40)	18
図6 第1堤防土層図(1/100)	10	図18 第4堤防土層図(1/100)	20
図7 第2堤防・第2試掘坑(1/200)	11	図19 第5土層図(1/60)	21
図8 第2堤防出土木杭および竹杭(1/40)	12	図20 第6試掘坑(1/200)	22
図9 第2堤防・第2試掘坑出土遺物(1/3)	12	図21 第8試掘坑(1/200)	22
図10 第2堤防土層図(1/100)	13	図22 第8試掘坑出土遺物(1/3)	22
図11 第3堤防・第3試掘坑(1/200)	14	図23 霞堤位置図(1/7500)	26
図12 第3試掘坑出土木杭及び竹杭(1/40)	15		

表目次

表1 出土遺物一覧表	23
------------------	----

写真図版目次

写真1 霞堤全景(北から)	写真8 第2土層(北から)	写真15 第4土層(北から)
写真2 第1堤防(南から)	写真9 第3堤防(南から)	写真16 第5土層(南から)
写真3 第1堤防(南から)	写真10 第3堤防木杭(南から)	写真17 出土遺物
写真4 第1土層(南から)	写真11 第3堤防木杭(南から)	写真18 出土遺物
写真5 第2堤防(北から)	写真12 第3土層(南から)	写真19 出土遺物
写真6 第2堤防(南から)	写真13 第4堤防木杭(東から)	写真20 霞堤(東から)
写真7 第2堤防木杭(東から)	写真14 第4堤防木杭(東から)	写真21 幸津井樋(北から)

第1章 調査の概要

I. 調査に至る経過

平成14年7月29日付けで、国土交通省九州地方建設局筑後川工事事務所より鳥栖市幸津町字上川原の堤防15,000㎡について、「二線堤防掘削に伴う埋蔵文化財等の有無及び取扱いについての照会」が鳥栖市教育委員会に提出された。対象地区は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、通称「霞堤」と言われ、佐賀藩築堤と伝承が残っている堤防であった。平成14年8月30日及び11月13日に鳥栖市役所で筑後川工事事務所、鳥栖農林事務所、鳥栖市農林課、佐賀県教育委員会文化課、鳥栖市生涯学習課の5者協議を行い、平成14年度に確認調査を実施し、その結果に基づき平成15年度本調査を実施することとなった。確認調査は堤防が使用されていることから降水量の少ない平成15年3月5日に実施したが、部分的に一部のみの調査となった。明確には築堤状況を把握することは困難であったが、近世築造と思われる堤防裾部を確認した。その後、佐賀県遺跡台帳に「霞堤」として登録した。平成15年8月12日に筑後川河川事務所（名称変更）との間に埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、雨量および安良川の水位が安定した平成15年11月13日から本調査を実施した。調査方法として全面調査ではなく数ヶ所の試掘坑を設定し、残りが比較的よいと思われる約2,000㎡について江戸期の堤防を調査対象とした。堤防掘削に伴う土については調査進行にしたがい堤防工事を請け負っている㈱栗山建設によって調査区外に運びだしていただいた。なおこの掘削土については安良川築堤工事に使用されている。平成16年1月14日をもって現場作業が終了した。なお、出土遺物・調査記録類の整理ならびに調査報告書作成業務は、平成16年5月26日～平成17年2月28日の期間、鳥栖市藤木町文化財整理室において実施した。

II. 調査の組織

鳥栖市教育委員会が主体となって実施した。組織は以下のとおりである。

調査主体	鳥栖市教育委員会	
教育長	中尾勇二	
教育部長	近藤繁美	
生涯学習課長	西川和彦	（平成15年度）
	西山八郎	（平成16年度）
生涯学習課参事	高尾泰明	（平成15年度）
	権藤民二	（平成16年度）
生涯学習課長補佐	藤瀬禎博	（市誌編纂係長兼務）
生涯学習推進係	田中啓子	（庶務担当）
文化財係長	石橋新次	
文化財係主査	鹿田昌宏・湯浅満暢・久山高史	
文化財係	内野武史	
	島 孝寿	（確認調査・本調査・報告書作成担当）
調査協力	国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所・佐賀県教育委員会文化課	

第2章 地理的・歴史的環境

I. 地理的環境

佐賀県東部に位置する鳥栖市は、福岡県久留米市・小郡市・筑紫郡那珂川町と県境を接し、南には筑後川が流れ、北は背振山地の東端に有し、筑紫平野の一端に位置する地域である。現在では九州縦貫道と九州横断道、J R鹿児島本線と長崎本線及び久大本線、国道3号線・34号線等、また古代には大宰府・筑後国府・肥前国府を結ぶ官道（城の山道・筑後路・肥前路）、近世には長崎街道が通過する場所であり、古くから九州の大動脈を結ぶ交通の要衝の地である。

地勢は北から北西にかけて九千部山（847.5m）を主峰として東に杓子ヶ峰（312.1m）、西に石谷山（754.4m）が連なり、それぞれ南東ないしは南方向に丘陵地に伸び、平坦部になって筑後川に至る。山々は幾重にも重なり合い、各支嶺間は断層によって生じた裂け目（構造谷）を流下する河川が山地を侵食して、山麓に扇状の堆積地を形成している。

地形は杓子ヶ峰に連なる柚比・今町の高位段丘と九千部山の南から城山（501.3m）・群石山（201.1m）に至る支嶺の間の断層線に沿って大木川が流れ、山麓には神辺扇状地を形成する。大木川左岸は柚比丘陵群から曽根崎方面へ連続する標高15～80mの低～高位洪積段丘となり、右岸は現市街地を載せて広がる標高15～25mの独立低位段丘となる。一方、九千部山の南西側より起った支嶺は、石谷山・雲野尾峠・笛吹山の丘陵地へと低下し、支嶺の間には安良川が流れ、山麓には養父扇状地を形成する。石谷山を水源とする沼川の間は、標高15～80mの低～高位の洪積段丘となり、朝日山（133m）によって北の麓地区・南の旭地区に二分される。河川はいずれも南流し、筑後川へ注ぐが、下流域は標高10m以下の沖積低地の広大な平坦部となっている。

II. 歴史的環境

市内には現在約180遺跡が所在しているが、旧石器時代～近世に至る様々な遺構・遺物が出土している。

旧石器時代では、長ノ原遺跡・本川原遺跡・平原遺跡・牛原原田遺跡等で、ナイフ形石器や細石器類がみられるが、明確な遺構からの出土ではなく、詳細については不明である。

縄文時代になると、今町共同山遺跡から草創期～早期にかけての刺突文土器、早期では西田遺跡から多量の押型文土器に伴い、多数の集石遺構が検出している。前期では牛原原田遺跡から曾畑式土器、中期では平原遺跡から集石遺構とともに並木式土器が出土している。後期に入ると蔵上遺跡から土器棺墓・住居跡を検出している。晩期に入ると村田三本松遺跡では甕棺墓地群が形成されている。

遺跡数が急増するのは弥生時代前期末以降である。北部地区丘陵群（通称：柚比遺跡群）には八ツ並金丸遺跡・今町岸田遺跡、中期には平原遺跡・安永田遺跡、前田遺跡等の集落跡が確認されている。中期後半～末にかけて、安永田遺跡から青銅器鋳造関連の遺構、銅鐸・銅矛の鋳型が出土している。また南西部丘陵群（鳥栖市南西部）に位置する本行遺跡からも青銅利器、鋳型類が出土しており、安永田遺跡に匹敵する青銅器生産の拠点的な集落の存在が明らかになっている。墓域は、全市内に分布するが、多くは北部地区に集中しており、柚比梅坂遺跡・柚比本村遺跡・フケ遺跡・安永田遺跡等を挙げることができる。特に柚比本村遺跡からは赤漆玉鉤装鞘銅剣を含む7本の銅剣が甕棺墓及び木棺墓より出土し、また祖霊祭祀

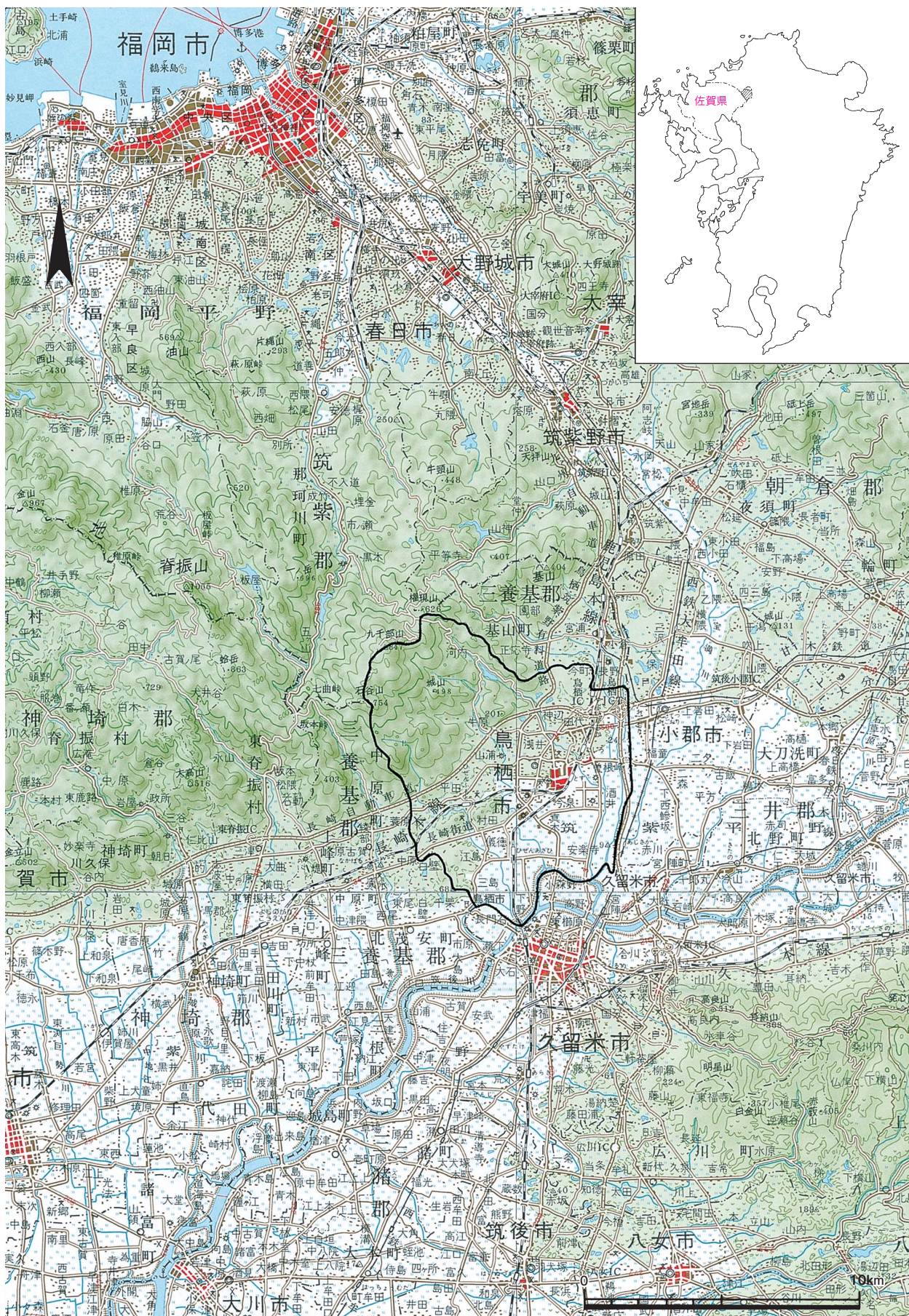


图1 鳥栖市周辺地形図 (1/200,000)

に使用されたと思われる弥生時代最大級の大型建物跡、多数の丹塗磨研土器を含む祭祀土坑を検出している。

後期に入ると丘陵部から現在の鳥栖市街地及び、中低位段丘上に集落が移動する。本原遺跡・牛原原田遺跡・内精遺跡がこれにあたる。内精遺跡からは住居跡が200軒以上検出され、後期前半から古墳時代初頭まで継続して集落が営まれていた模様である。また藤木遺跡からは環濠の一部を確認している。

古墳時代前期には赤坂前方後方墳、日岸田遺跡・今泉遺跡等から方形周溝墓が出土している。5世紀にはいと平原古墳・山浦古墳群・薄尾古墳群・田代東方古墳等の墳墓群が形成されていくが、集落関連遺構については牛原前田遺跡など現在のところわずかにすぎない。しかし、6世紀代に入ると状況は一変し、前半には剣塚前方後円墳・東田前方後円墳、後期は岡寺前方後円墳・庚申堂塚前方後円墳・牛原原田5号墳の5基の前方後円墳、田代太田古墳・ヒャーガンサン古墳の2基の彩色系装飾古墳が築造される。中型古墳としては梅坂古墳・神山古墳・稲塚古墳等がみられ、またこの時期には背振山系の山麓部を中心に東十郎・杓子ヶ峰・都谷・永田古墳群等の群集墳が数多く築かれる。現在把握している古墳数は600基を超える様相である。集落は元古賀遺跡・蔵上遺跡・内精遺跡・梅坂炭化米遺跡等が確認できる。

飛鳥～平安時代にかけては肥前国東端で筑前・筑後国と接する三国国境にあたり、大木川を境に北東部は基肄郡、南東部は養父郡に属する。「肥前風土記」によると、基肄郡は「郷陸（六）所、里十七」とあり、養父郡は「郷肆（四）所、里十二」とある。基肄郡家の位置は現在のところ不明であるが、八ツ並金丸遺跡では大型掘立柱建物跡から8世紀後半代の瓦が出土している。また、大久保遺跡からも同時期と推定される建物跡が多数確認されており、関連が注目される。養父郡家については、蔵上町の老松神社西周辺を推定地として考えていたが、これを裏付けるように蔵上遺跡から掘立柱建物跡を多数検出し、「厨番」と記した墨書土器が出土している。古代の集落跡は基肄郡域では八ツ並金丸遺跡・今町岸田遺跡・本川原遺跡・本原遺跡、養父郡域では牛原前田遺跡・立石惣楽遺跡・柳の元遺跡・蔵上遺跡などで確認されている。なお風土記の養父郡「烽壺所」は、朝日山に比定されている。

律令体制が衰退する平安時代後期以降、鳥栖地域においても荘園が形成されるようになり、13世紀末には基肄・養父両郡のほぼ半数の耕地を荘園が占めるに至る。この大部分は大宰府天満宮安楽寺領で、あとは宇佐八幡宮弥勒寺領だが実質的には土々呂木・曾禰崎氏等の御家人地頭によって荘園が支配されていた。今泉遺跡では濠を巡らした館跡と見られる13世紀前半頃の遺構が確認されている。

南北朝時代から戦国時代にかけての戦乱期、この地域は支配者の交代が頻繁にみられるが、この時期、山浦町や牛原町周辺には山城が築かれるようになる。この一帯は明応6年（1497）に筑紫氏が鳥栖地域を押さえて以降、天正14年（1586）に島津氏に攻略されるまでの約90年間、勝尾城を本城に多くの支城群が構成され、山麓には武家屋敷や町屋など城下町も形成されている。

近世以降、基肄郡と養父郡の東半分は対馬藩領に、養父西半は佐賀藩領となる。また長崎街道が整備されるとともに両藩領域にはそれぞれ田代宿、轟木宿が設けられた。田代宿には対馬藩肥前田代領（1万6千余石）の統治機関として代官所が設置され、轟木宿では佐賀藩の番所が設置されていた。

明治時代になると厳原県・伊万里県・三潞県・長崎県を経て明治16年に佐賀県となった。昭和29年には、鳥栖町・田代町・基里村・麓村・旭村の5町村が合併し、鳥栖市として今日に至っている。

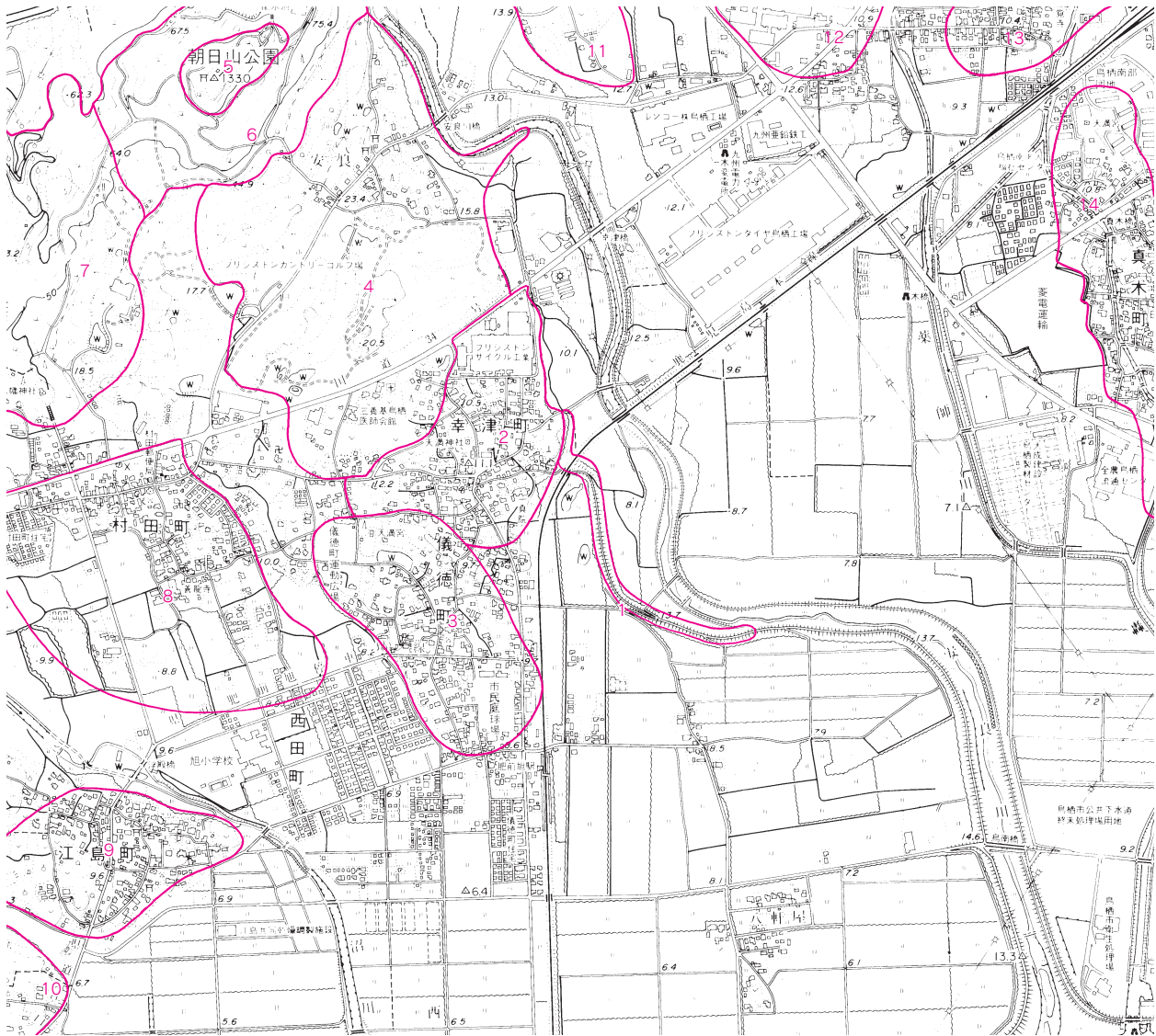


図2 遺跡分布図 (1/30,000)

1 霞堤 2 幸津遺跡 3 儀徳遺跡 4 安良遺跡 5 朝日山城跡 6 朝日山古墳群 7 村田古墳群 8 村田三本松遺跡 9 江島遺跡 10 本行遺跡 11 外精遺跡 12 四本松遺跡 13 内畑遺跡 14 真木遺跡

鳥栖地域の近世遺構

江戸時代の鳥栖市は、東半分を対馬藩、西半分が佐賀藩に分かれており、対馬藩領には代官所（現：田代小学校グラウンド）が設置されていた。また東明館（対馬藩校）が隣接して造られ、長崎街道を中心に町屋群が現在の田代上町・田代昌町・田代大官町・秋葉町付近で形成された。南部の水屋町には山王橋と呼ばれていた水門が整備され、筑後川を経由し対馬への流通ルートを構築していたようである。佐賀藩では轟木宿に番所・御茶屋（藩主の宿泊施設）などが整備され、幸津井樋、五反三分池といった水利土木工事が盛んに行われていた。また佐賀藩のなかには白石鍋島家（村田鍋島家）が創設され、村田町を中心に町屋が形成されていた。

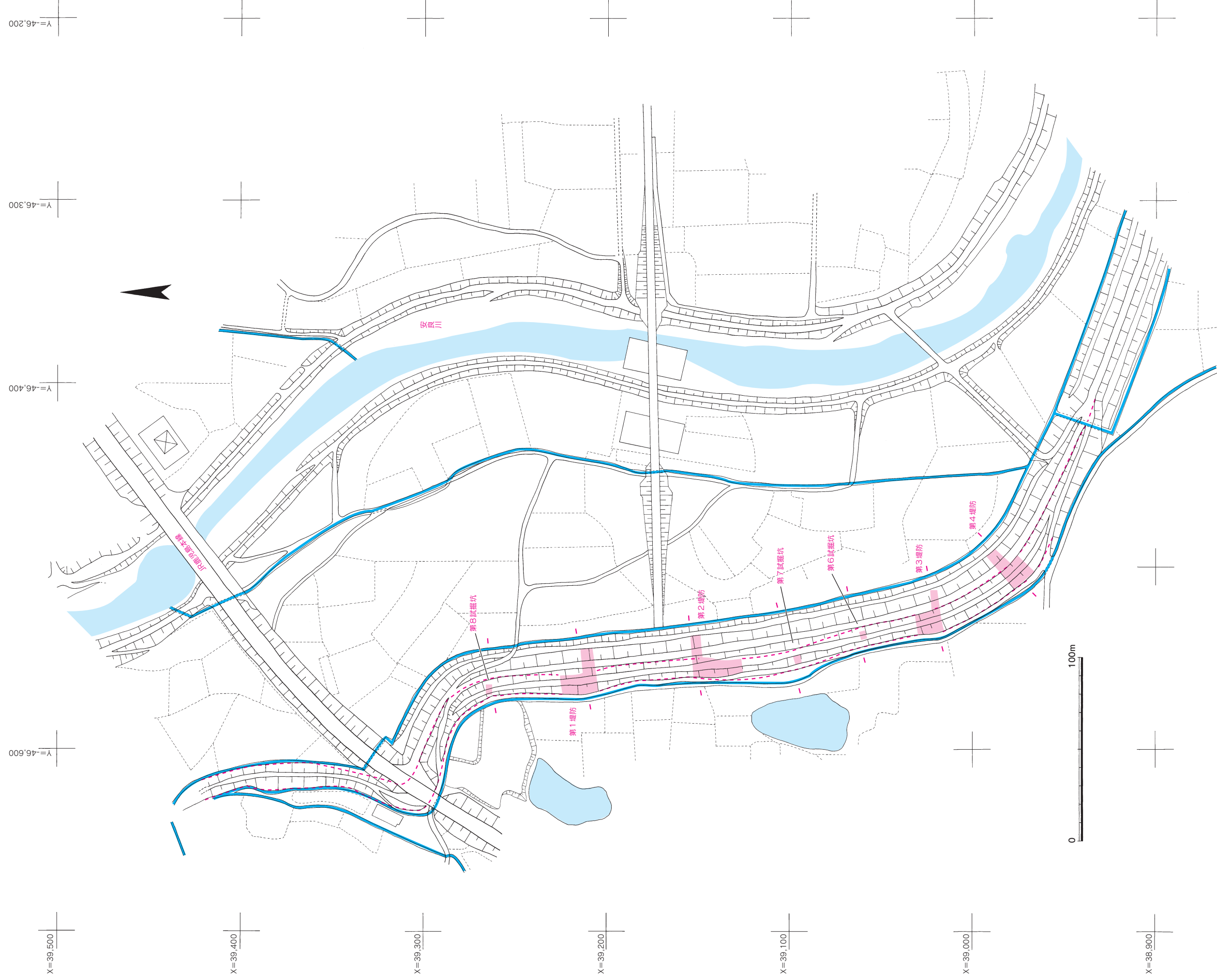


图3 霞堤现状位置图 (1/2000)

第3章 調査の内容

I 遺跡の調査

霞堤は、地元では佐賀藩士成富兵庫茂安が築堤したと伝えられている堤防で、幸津町に流れる安良川右岸に立地する堤防の通称名である。安良川本堤防に沿うように副堤（二線堤）が立地しており、その間の堤内地は遊水地として機能し、普段は水田・畑などに利用されている。

調査の方法としては、まず幅5m程の試掘坑を4箇所設定し基底面の確認を行った。現状の堤防は高さ約5mあり、調査の過程で崩落の危険性が予想されたため、堤防上部（天端）から約1～1.5m掘削した状態で一度精査し、土層図の作成および写真撮影を行った。その後精査した地点を重機で削平し安全面を確保した後、下部の掘下げを実施した。同様な作業を2・3度繰り返していき、基底面と思われる箇所まで段階的に掘下げていった。基底面はほぼ安良川の川底と同じ標高に位置しており、砂質及び泥炭層で水が染み出し、葦と思われる炭化物を多数みられた。また明確な縄張り（堤防築堤の際の目印）の跡と思われる木杭・竹杭等を数箇所検出した。

その後断片的に実測した土層図を接合し、土層及び出土した遺物、また他の地域の同時期の堤防などを参考にしながら江戸時代に築堤された堤防を法面に沿って重機によって掘削し輪郭を表すこととした。その結果、ほぼ当時の堤防が良好な形で出土した。

なお調査に伴い、便宜的に第1～8試掘坑、第1～4堤防という分け方で調査を実施している。

II 遺跡の概要

今回調査の対象となった二線堤は、長さ約400m、幅約30mを測り、南北に伸びる堤防である。周囲には水路が廻っており遊水地の最も南に位置し、標高は約8mの地点に立地している。数度の大規模な改修工事が行われており、土層から5回程の規模拡大が伺える。第1～第5期工事の築堤過程に分けることができ、第1期工事については堤敷幅約10m、高さ約2.5mを測る。第2期工事は堤内地に盛土し拡張するように築かれ、堤敷幅約13m、高さ約2.5mを測る。この第2期工事には多くの川砂が見られ、安良川から運ばれた砂を用いたようである。遺物についても第1・2期工事の層から出土する陶磁器は17世紀前半期・17世紀後半～18世紀前半の二時期に分かれる。また拡張工事を実施する場合は、造成する時点で法面の表土及び腐食した土を削りとした形成がみられる。

第3期工事は、堤敷幅約20m、高さ約3mを測り、18世紀後半～19世紀前半期の遺物が中心に出土する。築堤状況を示す土層から第1・2期工事と比べ雑な盛土が施されている。ただ地元の古老の方の話では太平洋戦争時にも拡張したとのことであり、時期設定には再度検討が必要である。

第4期工事は昭和28年の大水害後拡張したとのこ



写真1 霞堤全景（北から）

とである。なお築堤過程において竹林を燃やし、のり先（裾部）に石を積み大雑把に土が盛られている。またヘドロ化した強烈な匂いを発する土であり、28水害後応急的に拡張されたものであろう。法面を削っておらず、よほど急ぐ工事だったようである。堤敷幅約25m、高さ約3mを測る。第5期工事については最近のものであり堤敷幅約30m、高さ約5mである。

第1堤防及び第1試掘坑

第1期工事は幅約2m、高さ約1mの三角形に土を盛り、それを基準として覆い隠すように盛土を施す。土質は砂質が中心となっているが、層のなかにわずかながら粘質系の土を用いている。確認できた法量は堤敷幅約10m、天端約2m、高さ約2.5mを測る。基底面について青灰色砂質土及び泥炭層で水が染み出す状況である。

第2期工事では堤防の嵩上げを行うように覆うのではなく、堤内地のほうへ堤敷幅を拡張していく。堤敷幅約12m、天端約5m、高さ2.5mを測る。



写真2 第1堤防（南から）



図4 第1堤防・第1試掘坑（1/200）

第3期工事は第2期工事同様、堤内地に拡大させていったようである。土層断面からこの堤防法面には竹根が残存しており、伐採後は焼き、そのうえに第4期の堤防が築堤されている。第2・3期工事の際はそのような形成は残っていない。堤防天端及び法面には当時、竹もしくは蘆を植えていたようだが、工事の際はそれらの根、腐食土などを除去して削りだし、その上に盛土を施している。第4期工事はこれらの作業工程が実施されていない。地元の古老の



写真3 第1堤防（南から）

話では、昭和28年の水害の際、本堤防を超え堤内地からも水が溢れ出しだしたそうで水害後、拡張工事が行われたとのことである。緊急時の拡張のため、簡単に燃やして盛土を施している。なお盛られた土は強烈なにおいを発しており、ヘドロ化している。第3期工事については堤敷幅約16m、天端約8m、高さ約3m、第4期工事については堤敷幅約20m強、高さ3m、天端15mを測る。

その後現在の形の堤防へと変わっていく（第5期工事）。その際高さ約5mほどに拡大していった。なお、第1期工事の天端を犬走りとして利用している。

遺物についてはおもに陶磁器が出土しており、肥前・唐津・中国系などが見られる。図5-1（中国：景德鎮）・3（中国：南方産）・7（肥前）・8（唐津）は16世紀後半～17世紀前半、図5-2（肥前）・6（肥前）については概ね17世紀後半～18世紀前半、図5-4（肥前）・9（肥前）は18世紀末～19世紀前半に位置している。出土地点と遺物から推測すると三時期、江戸時代前半（第1期工事）、江戸時代中頃（第2期工事）、江戸時代後半（第3期工事）に分けることができる。

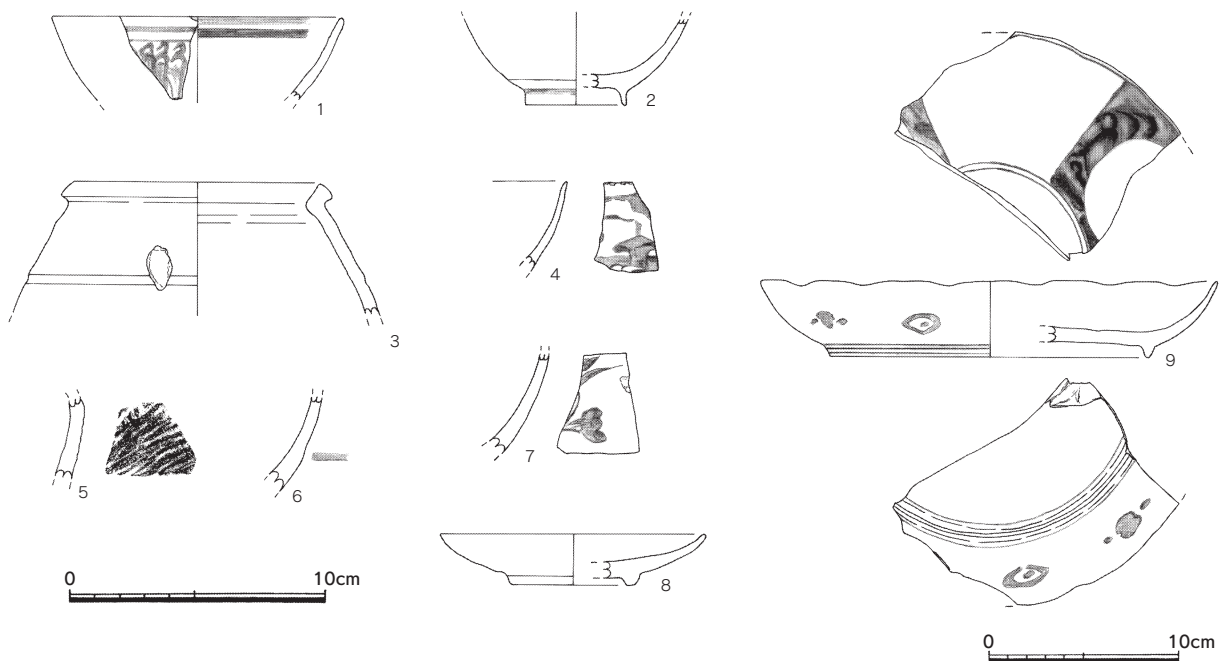


図5 第1堤防・第1試掘坑出土遺物（1/3・1/4）

_____ H=15m

_____ 10m

_____ H=15m



写真4 第1土層 (南から)

- 1～10 第1期工事 (砂質土が中心だがしっかり固められている)
- 11～13 第2期工事 (砂質土)
- 14・15 第3期工事 (砂・小石混入)
- 16 第4期工事
- 17 第5期工事

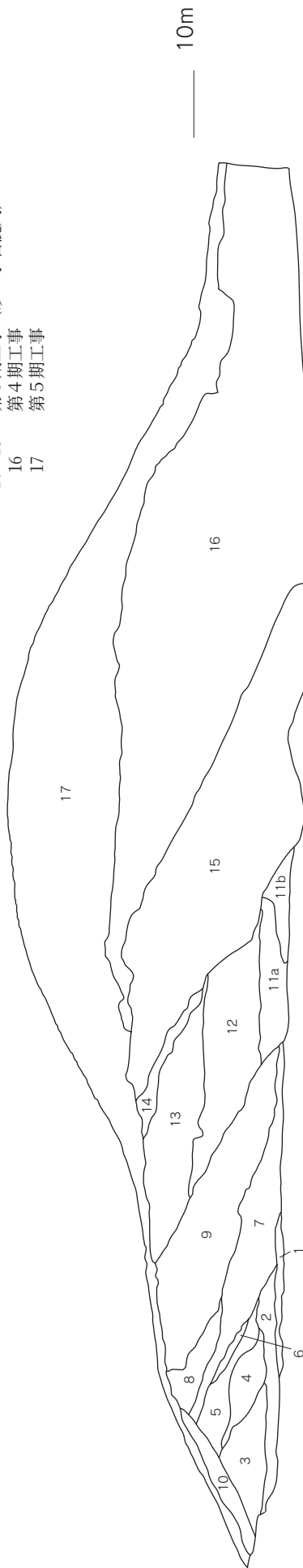


図6 第1堤防土層図 (1/100)

0 5m

第2堤防及び第2試掘坑

この調査地点からも第1堤防同様の結果が導き出せた。

第1期工事は三角形の小山を造り、その上に盛土を覆い隠すように嵩上げられている。台形型の形を有しており、築造工法についても同様であるが、基底面は砂及び青灰色の泥炭層で水が溢れ、築堤面が安定しないためなのか、木材を敷き詰めた地点も一部ある。ただし規則的に敷き詰めたものではなく、不規則に投げ入れられているようである。また堤防のり先については木杭及び竹杭が打ち込まれている。木杭は幅約20cm、長さは1m50cm強の木材を用いている。それらの木杭は1m程の間隔で打ち込まれており、その間に竹杭を打ち込こんでいる。ただ基底面が砂質のため脆く調査できなかった。そのため重機による木杭抜き取り作業を実施したが、1m50cmでも現れず、周辺の土が崩落し始めたため調査を断念した。木杭は簡単に加工している形跡がみられる。



写真5 第2堤防（北から）

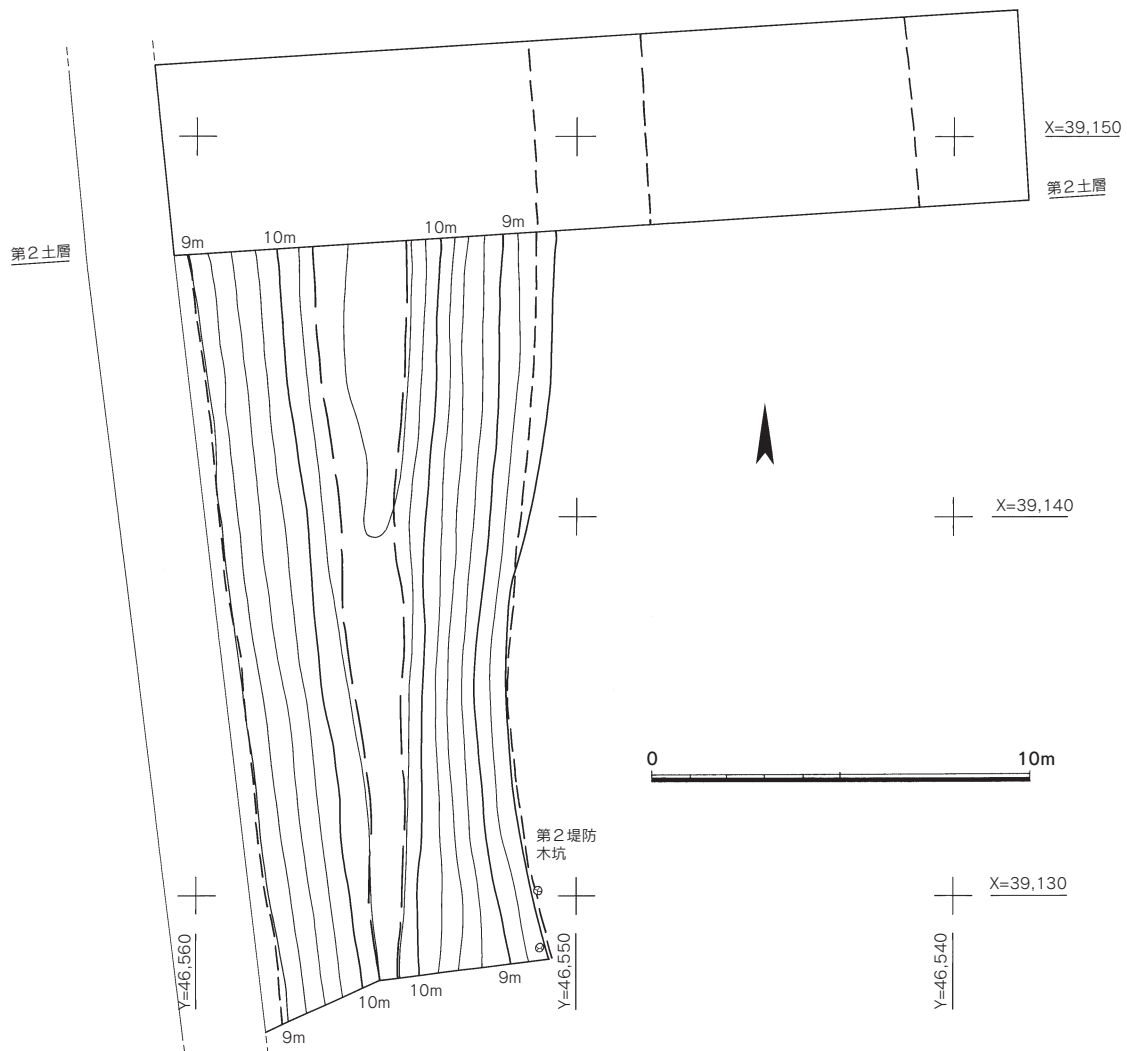


図7 第2堤防・第2試掘坑 (1/200)



写真6 第2堤防（南から）

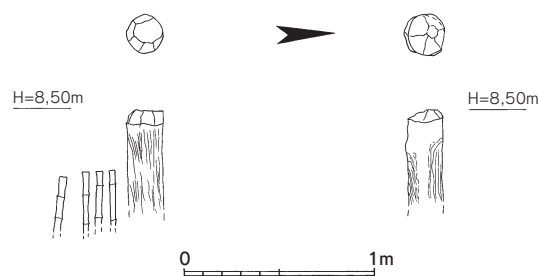


図8 第2堤防出土木杭および竹杭（1/40）

木杭の使用箇所は全体的に直線的な箇所には用いられ
ておらず、曲がり角（変換点）のみに配置されている
ことから、堤防築造に際し明確な区割りが行われてい
たことが推測される。堤敷幅約10m、天端約2.5m、
高さ約2.5mを測る。

第2期工事は、一部現在使用されている道によって
削られているが、堤敷幅約13mと見込まれる。第1堤
防との違いは第2期工事の際、盛土中に多数の灰白色
の川砂（安良川か？）の層が見受けられる。



写真7 第2堤防木杭（東から）

第3・4・5期工事については第1堤防と同様である。堤内地に拡大させていき、第5期工事では第1
期工事の天端を犬走りとして利用している。

第3期工事は堤敷幅約17m、天端約9m、高さ3mを測る。

第4期工事は堤敷幅約20m、天端約12m、高さ3mを測る。

第5期工事は堤敷幅約25m、天端約5m、高さ5mを測る。

出土遺物は図9－13（肥前：内野山）が17世紀後半、図9－10（肥前）・11（肥前）が18世紀後半～19
世紀前半に位置する。遺物は第1期工事地点から出土していな
いが、第2期工事（江戸時代中頃）、第3期工事（江戸時代後半）
の遺物が出土している。遺物からも第1堤防と同様の結果が得
られる。

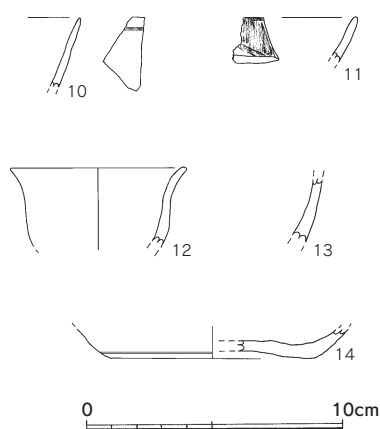


図9 第2堤防・第2試掘坑出土遺物（1/3）

H=15m

10m

H=15m

10m

0 5m



写真8 第2土層 (北から)

- 1～24 第1期工事 (砂質土と粘質土が混入する)
- 25～28 第2期工事 (砂が多数含まれる)
- 29 第3期工事 (砂・小石・粘質土が含まれる)
- 30 第4期工事
- 31 第5期工事

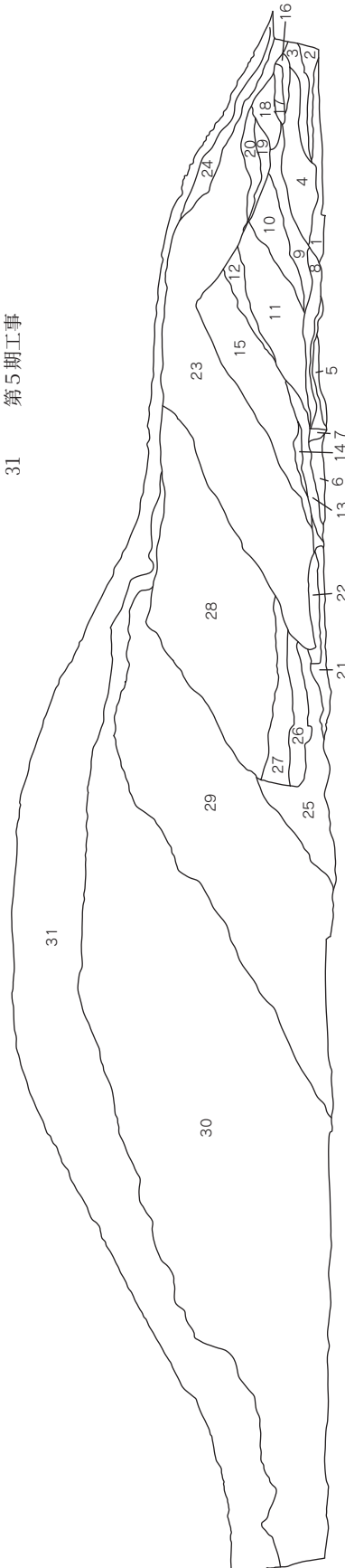


図10 第2堤防土層図 (1/100)

第3堤防及び第3試掘坑

第1・2堤防と同様の造りを施しているが、写真10で見られる木杭および竹杭に大きな特徴である。基底面から出土した木杭等は縄張りを示すものと思われる。天端及び西側の法面は道のため一部削平された状態であるが、木杭を基準にして堤防を築堤しその後嵩上げが行われている。

基底面は、砂質土および青灰色の粘質系の土で水が染み出してくる。なお、第2試掘坑に比べ基底面は粘質系の土が大多数を占める。

堤防の土質は他の土層と変わらず、砂質土を多く用いており、築堤方法も他の地区同様な盛土方法が用いられている。

木杭は約1mごとに備え付け、それにあわせるように竹を3段に組んでいる。なおほとんどが竹であるが一部木を用いている。必ずしも材質は竹というわけではなく、あり合わせのもので対応していたと推測される。また木杭は他の試掘坑から出土したものは基底面にかなり打ち込んでいるが、この試掘坑の木杭については備え付けるように設置されており、打



写真9 第3堤防（南から）

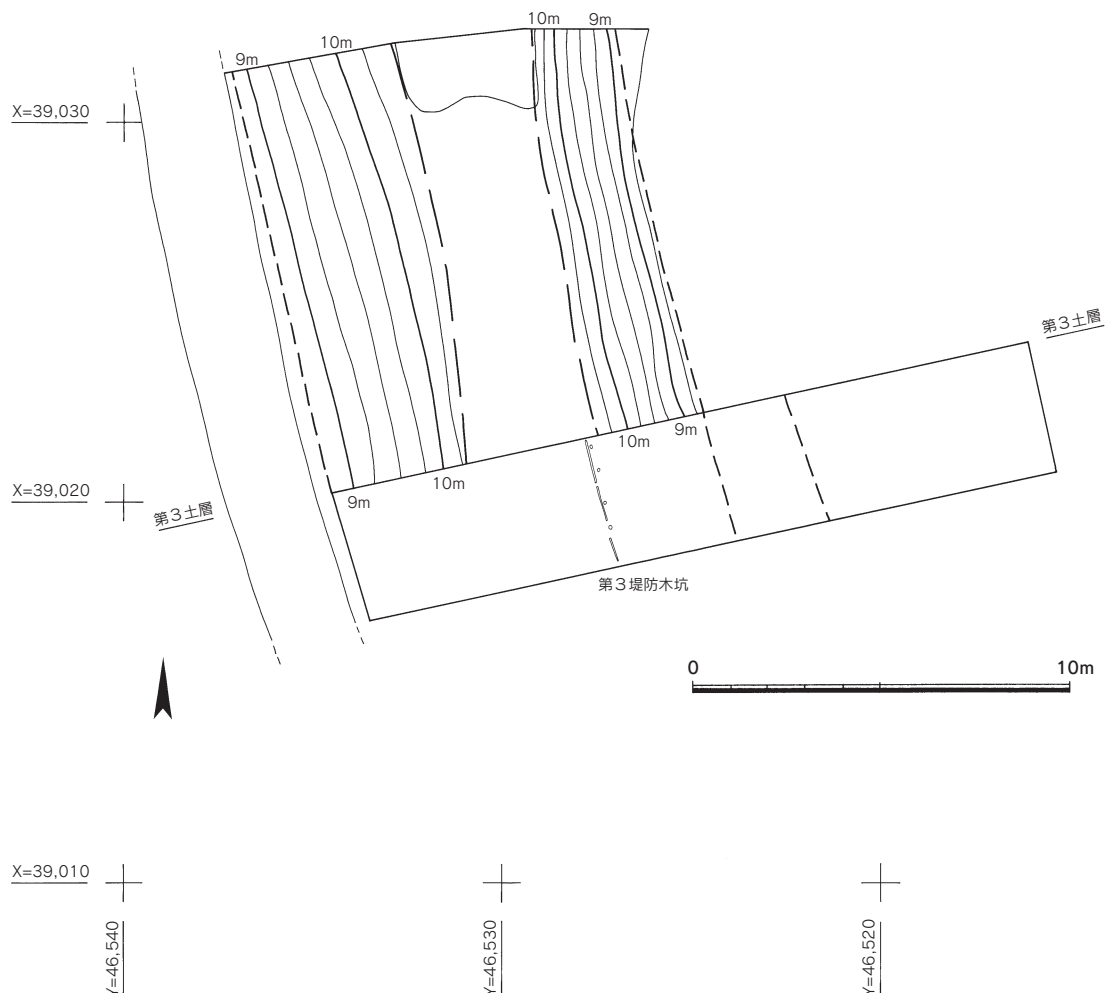


図11 第3堤防・第3試掘坑 (1/200)

ち込み等を行われていない。木杭の法量は統一されておらず、また形も様々である。最大のもので幅10cm、高さ15cmを測る。竹についても直径2～3cmほどの細い竹を使用している。

第1期工事は、堤敷幅推定10m、高さ約2mを測る。やはり築堤において三角形の盛土が基準となっている。天端は削平されており西側法面（裏・内法）についても現状では確認できない。多くの三郡変成岩が含まれている。

第2期工事は堤敷幅約13m、天端5m、高さ3mを測る。堤内地のほうに拡張されている。土は砂質系を多数使用されている。

第3期工事については堤敷幅約15m、天端約8m、高さ約3mを測る。灰白色砂質土と固めの土を交互に重ね合わせて盛土が施されている。ただし、砂の部分脆い状態である。その盛土に崩れないためか嵩上げを行っている模様だが、現状の堤防の犬走りの位置に立地しているため、削平を受けていると思われる。

第4期工事は堤敷幅約25m、天端約6m、高さ約5mを測る。竹根が残る箇所に直接盛土を施している。盛土は強烈なおいを発している。

第5期工事は堤敷幅約25m、天端約6m、高さ約5mを測る。第1・2期工事の天端を犬走りに使用している。

遺物は図13-15（肥前：火入）・16（肥前：播鉢）が出土しているが、17世紀後半～18世紀初頭に位置している。第2期工事内の出土である。なお、図13-17（青磁）・18（青磁）も出土している。



写真10 第3堤防木杭（南から）



写真11 第3堤防木杭（南から）

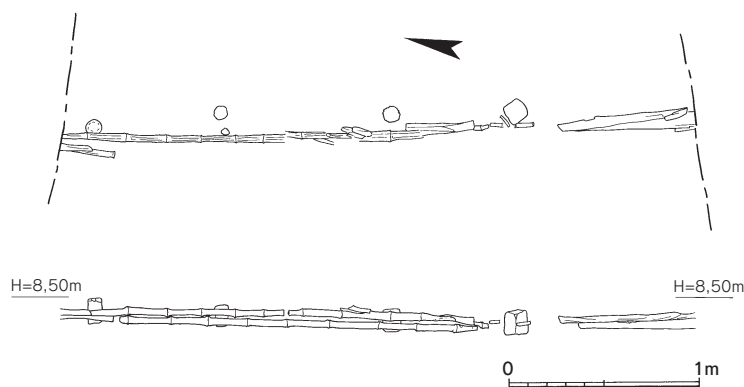


図12 第3試掘坑出土木杭及び竹杭（1/40）

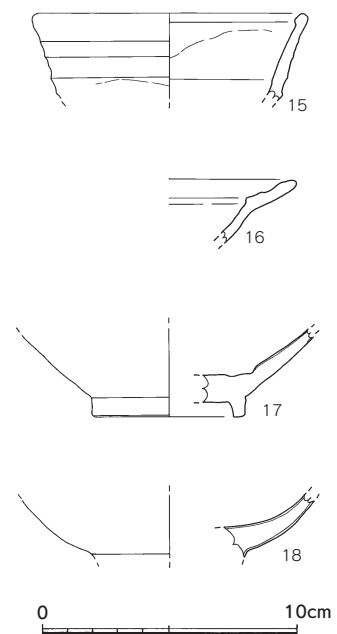


図13 第3堤防・第3試掘坑出土遺物（1/3）

H=15m

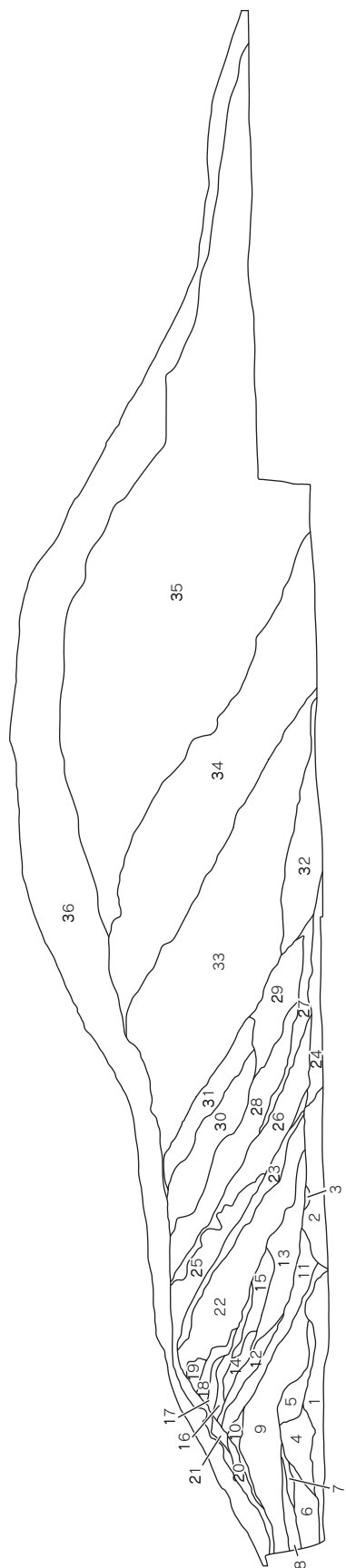


10m

H=15m

- | | |
|-------|-------------------------|
| 1～31 | 第1期工事 (砂質・粘質土が混入する) |
| 32～33 | 第2期工事 (砂・粘質土が交互につまれている) |
| 34 | 第3期工事 (砂・粘質土が含まれる) |
| 35 | 第4期工事 |
| 36 | 第5期工事 |

写真12 第3土層 (南から)



10m

図14 第3堤防土層図 (1/110)



第4堤防及び第4試掘坑

第4堤防については、試掘坑および土層調査を実施した。

この試掘坑からも木杭及び竹杭が出土した。堤防のり先の木杭を確認したほか堤防を最初に造ったときのものと推定される中心点を示している竹杭を検出した。木杭と竹杭がほぼ均等に配列された状況である。東側のり先の木杭は確認できなかったが、推定すると約5mの堤敷幅の基底面が推測され、この規模が最初の基準となり、第1期工事で約10mの堤防として築堤されたものと思われる。これらの木杭・竹杭については、堤防がカーブする地点に設置されていることから明確な築堤設計が執り行われていたことがわかる。

第1期工事については堤敷約幅10m、天端約4m、高さ約2.5mを測る。三角形の基礎をまず造り、盛土の嵩上げを行う。土質は砂質状であるが、何層にも嵩上げが行われている。

第2期工事については堤敷幅約13m、天端約5m、高さ約2.5mを測る。堤内地のほうに盛土が行われる。ただ他の堤防土層と違う点については第2期工事でも嵩上げが行われていることである。この地点がもっともカーブを描く地点であり、強固なつくりを施したものではないだろうか。

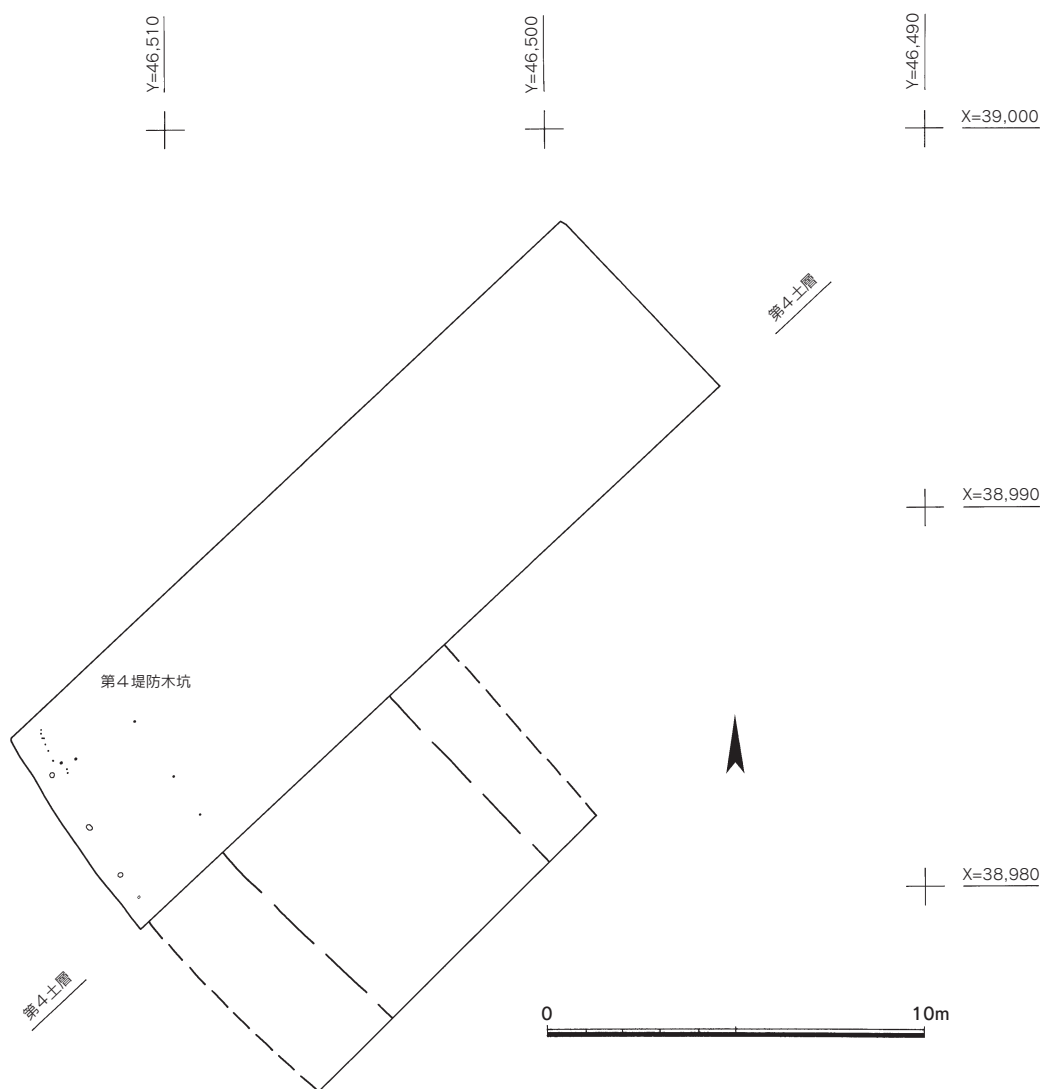


図15 第4堤防・第4試掘坑 (1/200)

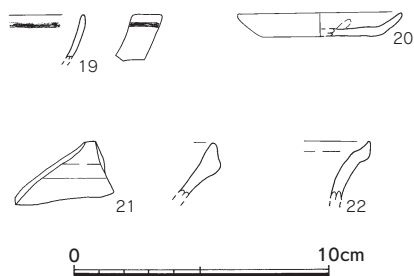


図16 第4堤防・第4試掘坑出土遺物 (1/3)

第3期工事については堤敷幅約18m、天端約10m、高さ約3mを測る。かなりの川砂が使用されており、脆く、詳細な土層確認はできなかった。その上にしっかりとした土層を嵩上げて強度を図っている。

第4期工事については堤敷幅約20m、天端約12m、高さ約3mを測る。他の土層同様に竹根があり、燃やした跡が確認できる。また盛土も強烈なおいを発している。

第5期工事については堤敷幅約30m、天端約5m、高さ約5mを測る。第1・2期工事の天端を犬走りに使用している。

出土遺物は図16－19（中国産）・20（土師皿）・21・22

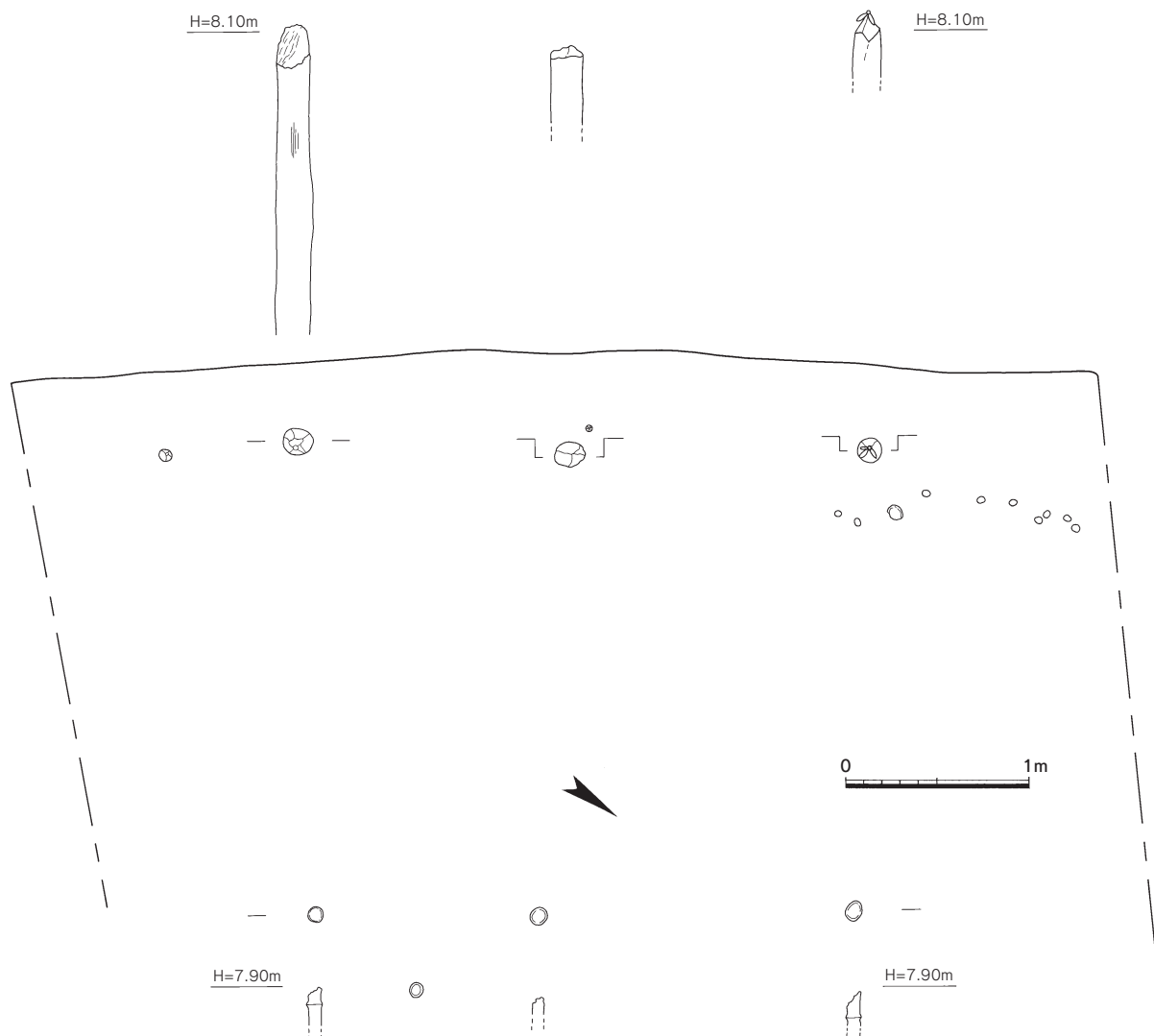


図17 第4試掘坑出土木杭および竹杭 (1/40)

が出土している。19については16世紀末に位置しており、他には堤防築造時期の遺物は確認できなかった。なお、21については14～15世紀に位置する遺物も出土している。

木杭および竹杭について

ほぼ同一的に均等に配置されている。またその周辺からは竹杭が木杭の周辺を取り囲むように配列されている。なお現在道で使用されている地点にも多数の竹杭が目視できるが、地盤の弱さおよび道が現在生活道路として利用されており、これ以上の調査は道が陥没してしまう恐れがあり断念した。木杭は、直径約20cm、長さ2m強が予想され、基底面をさらに掘り下げたが、これについても確認できる範囲の調査を実施した。なお推定では3m近くあるものと思われる。竹杭については中心点と思われるが、深さは基底面から50cmほど打ち込んでいた。基底面は水が溢れ出し、これ以上の調査は断念した。



写真13 第4堤防木杭（東から）



写真14 第4堤防木杭（東から）

第5土層

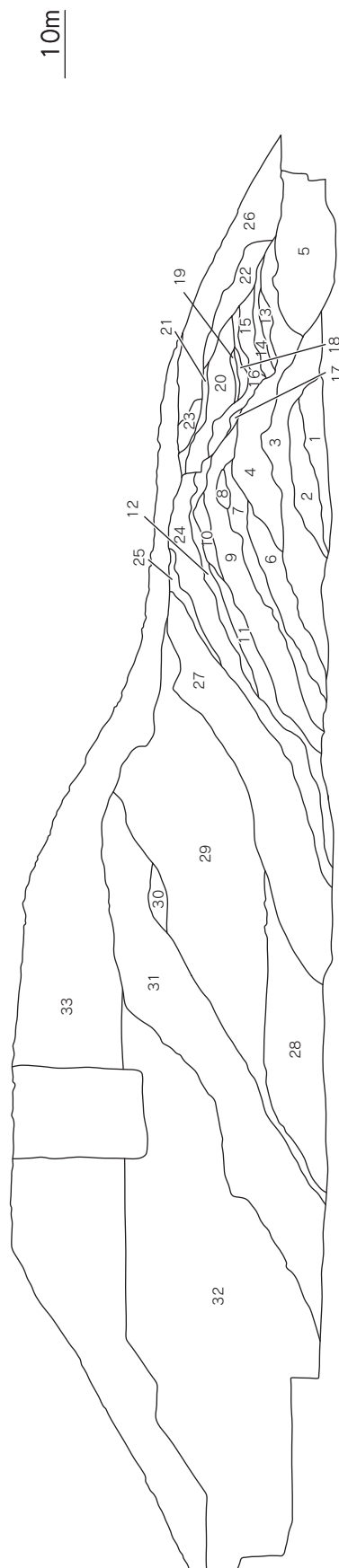
第1堤防の北側に位置する土層断面調査を行った。基本的には第1土層が続くものである。この層に関しては、第1期工事土層のみの調査を実施した。第1期工事については堤敷幅約10m、天端約3.5m、高さ約2.5mを測る。図化および写真は記載していないが第2・3・4・5土層もはっきりと残っており他の堤防同様の造りを施している。



10m

写真15 第4土層 (北から)

5m



10m

図18 第4堤防土層図 (1/100)

- 1～27 第1期工事 (砂質・粘質土が混入)
- 28～30 第2期工事 (砂を多く含み、間に粘質土が含まれる)
- 31 第3期工事 (砂・小石・粘質土を含む)
- 32 第4期工事
- 33 第5期工事

5m



0

5m



写真16 第5土層 (南から)

1～5 砂質土
6～16 粘質土

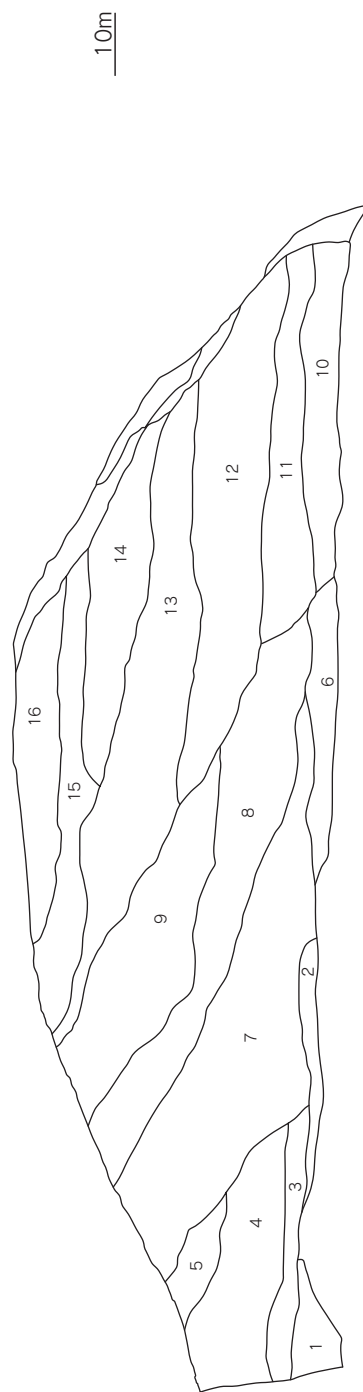


図19 第5土層図 (1/60)



第6・第7・第8試掘坑

調査区内に幅約3mほどの試掘坑を設定した。第1～4堤防および第1～5土層との整合性が認められるのかを主眼にした。図化したのは第6試掘坑（図20）および第8試掘坑（図21）である。裾部までの試掘坑でないため、詳細については不明な点が多々あるが、第1および第2期工事期の天端を確認することができた。特に第8試掘坑は明瞭に天端をみることができた。第6・7試掘坑地区は第2・3堤防の間に位置しており、道等かなりの削平を受けていることもこれらの試掘坑からも明らかになった。出土遺物については第8試掘坑から図22～23（肥前）が出土しており17世

紀前半～中頃に位置する。これらの堤防および試掘坑から考えると堤防は拡張され、測量図（図3の赤）で示している地区が江戸時代に築造されたものと思われる。なお遺物の時期から判断しても遺構築造時期はほぼ一致するものである。

そのほかに各試掘坑および堤防からは多数の弥生土器（甕棺片）、土師器、須恵器、青磁などが出土している。これらについては堤防築堤とは直接関係がないため図化していないが、構築土をどこから運んだかの手がかりを示すものである。これだけの土量を使用していることから周辺地区から運ばれてきたものと推測できる。そのなかには多数の甕棺片が含まれており、ひとつの手がかりを与えてくれる。甕棺墓が出土する地点としては幸津井樋と隣接する朝日山周辺がこの地区では最大の甕棺墓群であり、また朝日山特有の石（三郡変成岩「縞状角閃岩」）が堤防内から確認できることから、その周辺と推測される。またその地区には佐賀鍋島藩白石家の陣屋跡地と推定される地区もあり、陣屋築造時に山を切り開いた土を用いたことも考えられる。

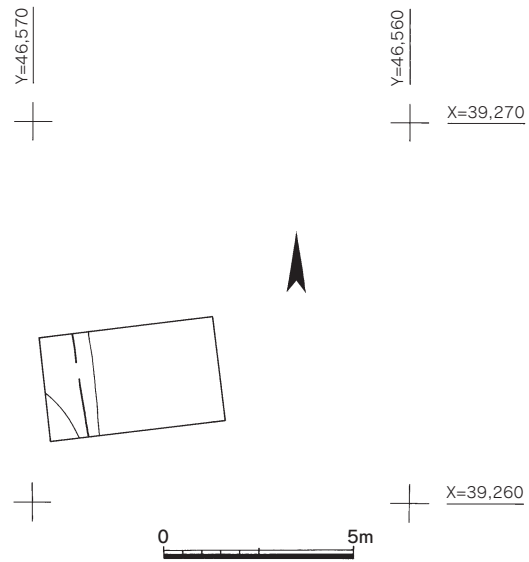


図20 第6試掘坑 (1/200)

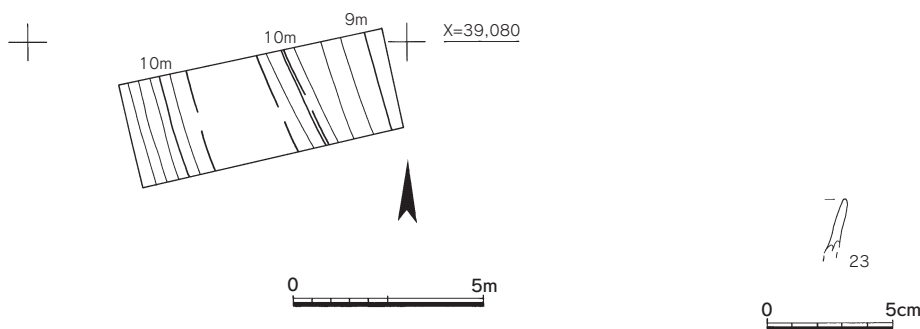


図22 第8試掘坑出土遺物 (1/30)



図21 第8試掘坑 (1/200)

表1 遺物一覧表

1. 法量の単位はcm。() は復元径、〈 〉 は残存径。①口径②器高③底部径④高台径の計測値で記す。
2. 時期については凡その目安である。

出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	産地	種別	器種	法量①口径②器高 ③底径④高台径	形態・技法の特徴	時期	備考	遺物登録番号
図5-1	第1土層 (11層)	中国産	磁器	碗	① (11.6) ② 〈3.3〉	口縁部一部残存	16世紀後半～17世紀初頭	染付(景德鎮)	030527
図5-2	第1土層 (第2期工事)	肥前	磁器	碗	② 〈3.4〉 ④ (4.0)	底部1/6残存	17世紀後半		030496
図5-3	第1土層 (第3期工事)	中国産(南方産)	陶器	壺	① (9.8) ② 〈5.1〉	口縁周辺1/5残存	16世紀後半		030519
図5-4	第1堤防 (第3期工事)	肥前	磁器	碗	② 〈4.0〉	口縁部一部残存	18世紀末～19世紀初頭	染付(楼閣)	030522
図5-5	第1堤防 (第5期工事)	中国産(南方産)	陶器		② 〈3.3〉	一部残存	—		030513
図5-6	第1堤防 (第2期工事)	肥前	磁器	瓶	② 〈3.8〉	一部残存	17世紀後半～18世紀前半		030504
図5-7	第1土層 (8層)	肥前	磁器	碗	② 〈3.9〉	一部残存	17世紀前半～中頃	染付	030503
図5-8	第1堤防基底面	唐津	陶器	皿	① (10.6) ② 2.0 ④ (5.0)	口縁部から底部1/4残存	16世紀末～17世紀初頭		030529
図5-9	第1堤防 (第5期工事)	肥前	磁器	皿	① (24.2) ② 4.0 ④ (17.0)	口縁部1/7、底部1/4残存	18世紀末～19世紀前半		030514
図5-10	第2堤防 (第3期工事)	肥前	磁器	碗	② 〈2.7〉	口縁部一部残存	18世紀後半～19世紀初頭		030498
図9-11	第2堤防 (第3期工事)	肥前	磁器	皿	② 〈1.8〉	口縁部一部残存	18世紀後半～19世紀前半	染付	030517
図9-12	第2堤防内	肥前(嬉野産?)	磁器	小盃	① (7.0) ② 〈3.1〉	口縁部一部残存	17世紀?		030524
図9-13	第2堤防 (第2期工事)	肥前(内野山)	陶器	皿	② 〈2.5〉	一部残存	17世紀後半		030523
図9-14	第2堤防内	—	土師器	皿	② 〈1.2〉 ③ (8.0)	底部1/5残存	—		030511
図13-15	第3堤防内 (第2期工事)	肥前	陶器	火入	① (11.0) ② 〈3.4〉	口縁部内弯、口縁部1/6残存	17世紀後半～18世紀初頭	鉄釉	030520
図13-16	第3堤防内 (第2期工事)	肥前	陶器	播鉢	② 〈2.5〉	口縁部一部残存	17世紀後半		030518
図13-17	第3堤防内	—	青磁	碗	② 〈3.4〉 ③ (6.0)	底部1/3残存	—		030525
図13-18	第3堤防内	—	青磁		② 〈2.5〉	底部一部残存	—		030502
図16-19	第4堤防 (第1期工事)	中国産	磁器	碗	② 〈1.8〉	口縁部一部残存	16世紀末		030521
図16-20	第4堤防内	—	土師器	皿	① (6.4) ② 0.9 ③ 4.4	口縁部から底部一部残存	—		030510
図16-21	第4堤防内 (第1期工事)	—	磁器		② 〈2.2〉	口縁部一部残存	14～15世紀		030501
図16-22	第4堤防内	—	陶器		② 〈2.3〉	口縁部一部残存	—		030507
図22-23	第8土層 (第1期工事)	肥前	磁器	碗	② 〈1.8〉	口縁部一部残存	17世紀前半～中頃		030531

第4章 まとめ

これまでは江戸時代に築堤されたと地元で伝承が残っているにすぎず、佐賀藩の水利事業である幸津井樋などは『疎導要書』に記載されていたが、そのほかについてはほとんど分かっていない堤防であった。

調査の結果、霞堤は江戸時代前期に築堤されたものであり、中期および後期に入り規模を拡大し、近代に入りさらに拡張されていったことが明らかとなった。

最初に築堤された堤防は、木杭等を用いて明確な縄張りが施され、それに基づき三角形の土台を築き嵩上げが行われている。また基底面は湿地地帯のため木で基底面を補強した形跡がみられる。中期、後期に入ると安良川堤内地のほうへ幅を拡張させていくのだが、高さには余り変化がみられない。さらに昭和28年の大水害を経て規模をさらに拡大させ、調査前の形に変化していった。約400年間拡張しながら現在の形になっていったのだが、28水害でも決壊した形跡はない。

土質については多量の水分を含んでいる比較的柔らかな砂質系であり、粘質土系を余り用いていない。また今回調査した地区では石積みは使用しておらず、この時代まで残存していたことに驚かされる。また拡張する際には堤防法面を削りだし、新たな土がしっかりと根付くようにしている。強い堤防を造る意思が感じられる。ただし28水害のあとはその余裕がなく、当時は竹堤であったため伐採後簡単に燃やし、その上に泥を積んだ事もわかりかなり緊急を要することが推測される。

出土遺物は少ないが凡そ3時期に分けることができる。16世紀後半～17世紀初頭、17世紀後半～18世紀前半、18世紀後半～19世紀前半である。土層から江戸期において3回の築堤が実施されたことがわかっており整合性も保たれている。ただ詳細な時期設定には再度精査する必要があるようである。

鳥栖地域では土木遺産の調査は皆無の状態であった。今回の調査で佐賀藩水利事業の一端を調査できたことは今後の近世遺構の調査を行ううえでの参考となるものである。

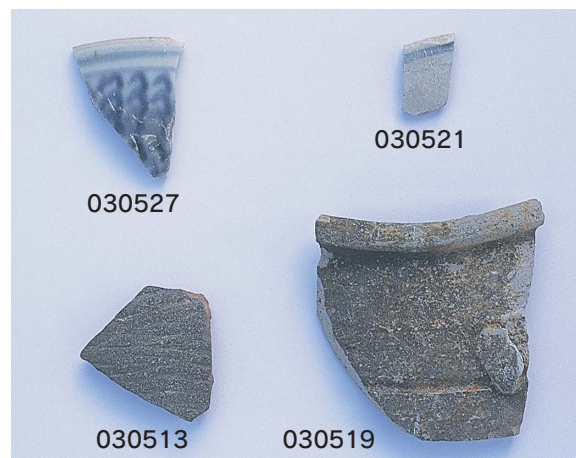


写真17 出土遺物



写真18 出土遺物



写真19 出土遺物

第5章 霞堤の築造意義

霞堤とは…

今回調査を行った地点を通称『霞堤』と地元では呼ばれているが、土木用語では「不連続な堤防で洪水時には堤の下流側先端の不連続部分から洪水の一部を堤内地へ流入させることにより本流の最高流量を低くする」との意味をもっているとのことである。

霞堤とは今回調査を実施した地点を含めた総面積30haにも及ぶ安良川右岸一帯の総称である。安良川の氾濫防止とともに耕作地としての利用にも大きな役割とした巨大な遊水地として、江戸時代前期に築堤されたことがわかった。人工的に築いた堤防と自然地形を利用し、安良川本堤防が決壊した場合、右岸地区に位置する幸津町・江島町・村田町が水に浸からないように強大な遊水地を設け水害を未然に防ぐ役割をもったものである。また関連施設として幸津井樋・上川原堰などの分水施設が立地しており、現在でも多くの水田で利用されている。

この章では霞堤に係る事項および周辺地区の同時期の水利事業関係について述べてみたい。

鳥栖地域の水利事業

鳥栖市は、古代より基肄郡（大木川左岸および基山町一帯）と養父郡（大木川右岸）の2郡に分かれていた。基肄1郡と養父半郡は、慶長4年（1599）に対馬藩領となって以来、宗氏の所領として代官所を設置していた。なお慶長検地では石高16,309石である。残りの養父半郡については佐賀藩領として、佐賀本藩および村田鍋島家の蔵入地が併設しており、今回調査を行った地点は本藩地にあたる。

佐賀藩（約36万石）においてこの地区は、領国経営を行ううえでもっと東地区に位置しており、国境地帯でもあった。長崎街道の国境沿いには轟木宿を設け、番所や藩主が参勤交代等で使用する御茶屋（本陣）などが立地していた。また村田町には鍋島親類四家のひとつである鍋島村田家（6,000石）が設置されていた。

佐賀藩では多くの治水工事が実施されている。もともと佐賀平野は広大な平野が広がり穀倉地帯であったが、半面クリークなどの水路が入り組んでおり、低地に立地しているために水害に弱い地域であった。そのため江戸時代になると盛んに新田開発が行われる過程において水利事業も大きな役割としてさかんに実施されてきた。そのなかでも特に有名な治水事業としては石井樋（佐賀県大和町）、千栗土居（佐賀県北茂安町）、横土井（佐賀県多久市）などが挙げられ、これらは佐賀藩土成富兵庫茂安が残した大規模な治水事業である。特に千栗土居は鳥栖市と隣接しており、少なからず影響を与えていたようである。また市内にも五反三歩の池、幸津井樋といった水利事業が有名である。

幸津井樋

朝日山の東際で安良川を堰きとめて分水したもので直接には幸津、儀徳、下野あたり約150町を灌漑していた。嘉永3年（1626）に竣工したもので、成富兵庫茂安の事



写真20 霞堤(東から)

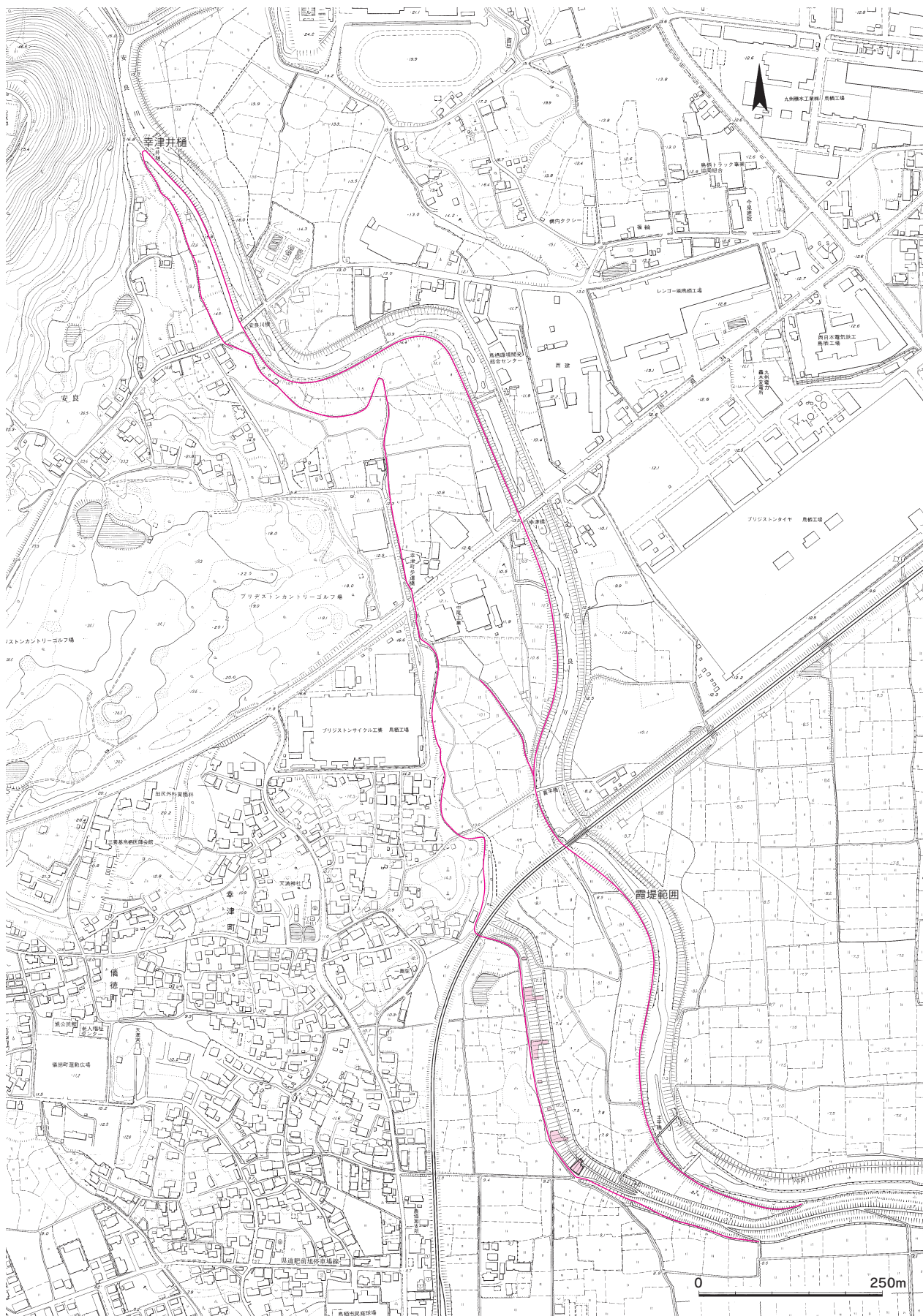


図23 震堤位置図(1/7500)

業であることを刻んだ石碑が、「往還ノ傍ニアリ」と『疎導要書』に誌されている。(現在、石碑は残っていない) そのほかにも菰苗井樋、高良井樋、中井樋、畑田井樋があり、大規模な灌漑施設として機能していた模様である。

石倉築堤

『疎導要書』には「石倉築堤」についても記載されている。「東西凡そ20間、高さ1間有半の石垣を築き、川底には多くの捨石をおいて固め、『豪雨ノ際激流の奔流スルモ破損決潰セシコトナシト』と述べられている。石積を使用した堤防については今回の調査においては確認していない。



写真21 幸津井樋(北から)

五反三歩の池

村田町に立地しており、立石町から流れ出る太刀洗川の水を樋管で導いて溜池を築いている。江島・三島各地を灌漑し沼川に到る。

霞堤からわかること

今回調査を行った霞堤のことについて述べた文献等は皆無であるが、わずかの資料および調査結果から次のような特徴が導き出される。

1. 佐賀藩の水利事業の一つである。
2. 築堤時期は江戸時代前期に位置し、数度（江戸期には2度の拡張）の拡張が行われている。また幸津井樋とほぼ同時期に造られており、ともに機能していたものである。
3. 巨大な遊水地を配し、本堤防が決壊もしくは、水が溢れ出したときの防御線としての役割を果たす。
4. 堰を設け各地域に分水し灌漑を行う施設である。
5. 佐賀藩東部地区の最も東側に位置する。
6. 堤防築堤の際、木杭・竹杭を用い明確な区割り（縄張り）を行い工事が行っている。

なお、調査対象地では石積の技法はとられていない。基本的には堰、石倉堤防以外は盛土のみで対応していることがわかる。

これらの治水事業については、農業生産の効率化および石高の増大をめざし、水害に強い領国経営を行ううえで重要な位置を成すものである。ただこれらの治水事業を行なうためには、それなりの技術力を保持していなければならない。成富兵庫茂安は戦国期に様々な城などを築き、それらの技術を保持することによって佐賀藩の大規模治水事業を展開してゆくことができたのである。これらの江戸時代の施設は、現在でも我々は使用しており当時の技術力の高さを改めて思い知らされる。

※なお、今回調査した地点の堤防は掘削のため消失したが、一部は対象外の地区（写真20）があり原型を残し、ほぼ江戸期の堤防規模を残している。(JR鹿児島本線北側：幸津町内)

〈参考文献〉

- 鳥栖市史 1973 「IX 佐賀藩領の通史」
- 福岡 博 1995 「水を中心とした国づくり、治水の神様成富兵庫茂安」
『江戸時代 人づくり風土記41 佐賀ふるさとの人の知恵』
- 南部長恒 1834 『疎導要書』
(佐賀藩士。諫早代官等を務め、佐賀藩の水利事業について記載している)
- 多久市教育委員会 1997 「横土井」 多久市文化財調査報告書第23集
- 北茂安町教育委員会 2000 「千栗土居遺跡」 北茂安町文化財調査報告書第9集

報 告 書 抄 録

ふ り が な	さいつかすみてい							
書 名	幸津霞堤							
副 書 名	安良川二線堤（霞堤）文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	鳥栖市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第75集							
編 著 者 名	島 孝寿							
編 集 期 間	鳥栖市教育委員会							
所 在 地	〒841-8511 佐賀県鳥栖市宿町1118 TEL 0942 (85) 3695							
発 行 年 月 日	西暦2005年2月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° 〃	東経 ° 〃	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号							
幸津霞堤 さいつかすみてい	佐賀県鳥栖市 幸津町字上川原 さがけんとりし さいつかすみてい	410213	—	33 ° 21 ' 07 "	130 ° 29 ' 59 "	20031113 ～ 20040114	12,000m ²	堤防撤去
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
幸津霞堤	堤防	江戸	堤防	陶磁器		江戸時代前期～近代に至る堤防		

鳥栖市文化財調査報告書第75集

幸 津 霞 堤

—安良川二線堤（霞堤）文化財発掘調査報告書—

平成17年 2 月15日 発行

編集 鳥栖市教育委員会

発行 佐賀県鳥栖市宿町1118番地

印刷 株式会社 三光

佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1